

# エンカウンター (ENCOUNTER)

第278号

2025年7月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28

山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源「エペソ人への手紙講解説教」より (12)

## エペソ書大観

エペソ書は学者によってパウロが書いていないという学者もございますが、しかし大部分の学者は、これはやっぱりパウロが書いたのであろうと、60から書いたのであろうとということになっておりますから、パウロの書簡ということになっておりますが、私はやはりすべての聖書の部分は、ロマ書と合せて併せて読む必要があると思うのであります。

ロマ書は、わたしは基督教のアルファでありオメガであると思うのであります。全ての基督教の真理がロマ書にちゃんと含んでいる。ちょうど玄米が日本人の人体が必要とする滋養分を全部

含んでいるように、たとえにはならないかも知りませんが、私は、ロマ書は、本当にキリスト教のアルファでありオメガである。どこを勉強するときにもロマ書と一緒に勉強する必要がある。

エペソ書のごときは、誠にダイヤモンドや真珠といろいろな宝石ばかりの書簡でありますけれども、ロマ書の理解がないときには、まるでめくらが色の浅い深いを論じ、耳しいたるものが声の好悪を言っているようなことになってしまいまして、浮いてしまう。そうでありますから、どうしてもわれわれはロマ書を学ぶ必要がある。

特にロマ書の初めの1章から3章まで、「万人、罪人である、滅ぶべき者である」とあるという、これが分かってこなければ、聖書の真理は移ってこない。ですので、我々何十年教会へ来ておりまして、もう1遍ロマ書の1章から3章までを勉強する必要がある。

## 「恵み」

「恵み」というのはいつも言っている通り、イエス・キリストの贖いです。イエス・キリストの贖い、これを「恵み」と言う。これをまた「神の愛」と言う。聖書で「神は愛なり」と言ったら「神は贖い主だ」ということです。それ以外ではない。われわれは恵みがわかってくると平安、われわれが神の子とせられ、永遠の命を頂き、そして天国を目当てとして生活する時に平安が来る。これはご利益。このご利益が無かったら、我々は信者の看板を外す必要がある。そういう言葉であります。

初めの3章、すなわち1章から3章までは、「贖い」のことを書いている。贖いというのはいつも言うこと。もう繰り返す必要はないでしょう。神がキリストをこの世に下して十字架につけて、そしてわれわれの罪とがけがれ、全てのものを処分して、われわれに永遠の命を与えて下された。これを贖いという。これによって我々は神の子とせられ、永遠の命を頂き、天国に行く者としてもらった。これが1章から3章までに書いてある。

## キリストの奥義

ここに「キリストの奥義」という字がありますが、贖いというのはキリスト教の奥義です。神の奥義ですから、人間の生まれつきのままでは分からない。我々の生まれつきの知識、知恵を超えている。そうですから、どうしてもこれは幼児のような心をもって聖書の言葉を信じ、それに従うよりしょうがない。そうですから、キリスト教は、贖いであり、神の奥義であるから、われわれの知恵を超えているというのをいつも知っておく必要がある。

## キリストに倣え

次の4章から6章へ入りますと行ないの問題であります、これはいつも信仰から出てくる。信仰が裏になっている。裏表になっているわけです。われわれは神の子とせられた信仰、復活の望みと、われわれは日々、永遠無限の栄光に近づきつつあるんだ。この神の子たるの信仰がなければ、これが出てこない。マネしてもこんなもの続かないですよ。

それはどういうふうに出てくるかと言ったら、イエス・キリストを見たらよろしい、イエス・キリストの一生涯を見たら、非常にこれが参考になる。エペソ書5章の1節、2節には、「キリストにならえ」と書いてあるから、イエス・キリストがすなわちわれわれのこれが手本になってくるわけです。未信者の時にも、贖いがわからん時にも、イエス・キリストが手本ですけれども、信者になってもやはりキリストが手本になる。同じ手本でもだいぶ性質がちがうけど、手本です。やっぱり、イエス・キリストは。

特にイエス・キリストが30年大工をしていたところを学ばなければいけない。われわれは人に見えることをしたい。人に褒められることをしたい。偉い者だ、と言ってもらいたい、われわれは。イ

エス・キリストは無限の力を持って、人間としては最高の力を持って  
いらっしやったけれども、大工。筋肉労働者。低い筋肉労働者を 30  
年やっておられた。こういうことは、神の子たるの信仰、復活のぞみ  
がなければできない。1年や2年はやれるけれど、10年、30年は続  
かないですよ。これは神の子たるの信仰、復活の望みを持っていらっ  
しやるからこういう芸当ができる。

## なすべきことをなす

行ないというものは、いつも言うとおりに、4章から6章までには「神の意思をなす」。「神の意思をなす」ということは、具体的に言えば、我々の日常の目の前の義務をなすことです。われわれの日常の目の前の、自分のなしたいことをなすのではなく、なすべきことをなす。これが愛という。パウロは「信、望、愛、このうち最も偉大なるものは愛なり」といった。そうですから何遍も何遍も言いますが、我々が自分のなしたいことをするのでなくして、なすべきことをなす。ここに人類の幸福はかかっている。

ペテロ、ヨハネは無学のただ人、と人が言いました。事実、その通りです。しかし、彼らは聖霊を受けて神の子とされ、復活の望みを持っておりましたから、目の前のことをなす力を持っていた。首がちぎられても自分のなすべきことはなした。そういう力を持っていた。私は、彼らは人類の教師であると信ずる。

## 主の名を呼んだら強くせられる

それから最後に、有名な4章から6章までの最後のところに、6章の10節「最後に言う。主にあって、その偉大な力によって、強くなりなさい」と。これはこの前申し上げましたとおり、ここに「力」という字が、強くなるという力ですが、「イエス・キリストの力の、その力によって、イエス・キリストの力の力。「力」という字が3つ来ている「強くなりなさい」これは受け身ですから、「強くさせてもらいなさい」という受け身です。自分で強くなるのではない。原語は受け身。

そうですからこの1節は、わたしは力が問題だといいましたが、ここに「力」に関する字が3つ出てきている。イエス・キリストの力、その偉大なる力によって強くせられよ。これです。力がなければ行ないができない。口でいくらいっても、愛が実行できない。

この聖霊による力、己に勝つ力、この力に人類の幸福はかかっている。家庭の幸福も、職場の幸福も、社会生活の幸福も、国際間の幸福も、どれもこれも皆、この力にかかっている。

そして、1章から3章までの信仰の結論は贖いでしょう。その贖いの結論は、ロマ書10章12節によれば、「贖いの恵みは主の名を呼び

求める者に与えられる」と書いてある。そうですから、贖いの力を得るには、「主の名を唱える」ということが最も手近な方法です。

そうですから「強くせられる」というこの19節は「主の名を呼べ」。  
主の名を呼んだら強くせられる。実行しましょう。

## 英語の勉強と信仰の類似点——毎日使うこと

内村先生は、「咲く花は多し、されど実になるは少なし。実となるは多し、されど熟するは少なし」と言われた。そのようにわれわれはどうしても、成熟するためには聖書の勉強が必要です。聖書の勉強なくして、キリスト教はない。どうしても聖書を知る必要がある。

私は大正6年10月の第3日曜日に初めて教会に行きましたが、教会へ行く時は、当時外交官を希望しておりましたから英語を勉強しに行った。そして聖書も学びたいと。聖書を学びたいというのは、これは副。大きな希望ではない。主として英語を学びたいから行った。そして第3日曜日に行きましたその目的が、やがて達せられた。英語を勉強したい目的が達せられまして、現在少しく英語は読めるようになった。それから副産物である聖書を知りたいということも、少しく皆さんのおかげで、させていただきました。聖書の真理というものは、英語の勉強とよく似ている。毎日やらなければ落第です。よろしいか。英語の勉強と信仰とはよく似ている。毎日使わなければいけない。